

はんない

～京都：伏見稲荷編～

今号からは、皆さんが班別自主研修で訪れそうな場所を紹介します。まずは、伏見稲荷です。

皆さんの住んでいる周りにも「〇〇稲荷」という名前のキツネの狛犬がいる神社がありますよね？ そういった稲荷神を祀る神社は日本になんと約3万社あるそうですが、その総本宮、1番偉い位の神社が、伏見稲荷大社なんです。ちなみに、京都を本拠地とする渡来人の秦氏の氏神でした。伏見稲荷の祭神は「宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）」という農業の神様で、「稲成り」から稲荷になったとも言われます。そこから、五穀豊穡・商売繁盛・交通安全など「現世利益は何でもこい」といったような神様として、現在では信仰されています。



ちなみに、キツネは、昔から神聖な動物とされていて、稲荷神社では神様の使い。一説には、昔畑の作物を食い荒らす虫や動物をキツネが食べてくれたことで豊作になったという言い伝えもあります。また、キツネと油揚げとの関係は、江戸時代にはじまったとされる「穴施行（あなせぎょう）」という民間信仰が原点になっています（この他にもいろんな説がありますが）。昔、豊作を祝う意味

で、村人がキツネの巣穴のそばにお結びをお供えた。しかし、あまり食べてくれなかったのもので、お結びを油揚げに包んでみた。すると食べてくれたので、それが評判となり習わしとなったというものです。



ところで、伏見稲荷に行くと、外国人が沢山いることに気がつきます。なぜなら、日本全国の観光地で、外国人に一番人気なのが、この伏見稲荷なのです（ちなみに、2位は「広島平和記念資料館」（広島市）で、3位は「厳島神社」（広島県廿日市市）。京都では「金閣寺」が4位、「清水寺」が7位にランクインしています）。世界遺産を押しつけて伏見稲荷大社が1位になった理由は、「朱と緑の魔界の神秘性」にあるようです（朱という色には、生命・生産に力をもつ稲荷神の“みたま”が宿っていると言われます）。米国の東洋文化研究者アレックス・カーさんは、著書『美しき日本の残像』（新潮社）で、伏見稲荷の魅力をこう紹介します。

何千、何万の鳥居の列が山の上まで永遠のように続き、人もほとんど来ないのであたりは静かな朱の世界になる。中国から伝わった道教の神の色の朱は伏見稲荷大社では圧倒的な存在力を放ち、道教のマジックを醸し出している。さらに、無秩序に並んださまざまな形の塚が雑然と並んでいる光景には、日本人の自由な芸術感覚が表われている。



その他、一般の外国人観光客からも、「朱い鳥居と山の緑の色合いに日本の平和の心を感じる（米国人）」「森の色とのコントラストがきれい（豪州人）」「鳥居が印象的で、不思議な気分になる。山を登るのも楽しい（スペイン人）」「色がカラフル。きれいで広い（クロアチア人）」「建物が少ないところや自然があるところが気に入った



（ドイツ人）」との声が聞かれます（また、日本の神社はだいたどこでもそうですが、京都や奈良の古寺と違って、参詣が無料だという点も高く評価されているようです）。

その外国人を虜にしている“異世界への入り口”が、本殿の後ろにある「千本鳥居」です。この鳥居は、伏見稲荷にお参りに来た人が、願い事が「通った」お礼の意味を込めて鳥居を奉納する習慣広がったもので、江戸時代から盛んになったそうです。今も鳥居を奉納する人が後を絶たず、奉納された鳥居は 5000 基、1 万基以上とも言われています。無秩序で、決して計画的とはいえなくても、日本人の信仰心と感謝の

積み重ねのありようがよく分かります。



「千本鳥居」をぬけたところに（所要時間約 10 分）の「奥の院（奥社奉拝所）」があります。その奉拝所の右側後に、「おもかる石」と呼ばれる顔の大ききくらの石があるのですが、この石は、

叶えたい願いを頭に思い浮かべながら石を持ち上げて、その時にこの石を、重いと思うか、軽いと思うか、というものです。思っていたより軽いと感じたら願いが叶い、重く感じたら願いがかなうのは難しい、と言われています。是非、皆さんも、願い事を思い浮かべながら、持ち上げてみてください。

帰り道は急ぎ足になると思うのですが、伏見稲荷の参道の名物に、「すずめ（うずら）の丸焼き」があります。なぜ、すずめの丸焼き？と言いますと、昔からすずめは稲の大敵と言われていて、稲を食い荒らすすずめを退治するために生まれたと伝えられています。現在、すずめは国内で決まった時期にしか狩猟が許されていないことから、うずらの方が多く見られるようになってきました。タレがたっぷり絡まった稲荷の名物。ほとんど



のお店で骨ありと骨抜ききの 2 タイプが売られています。見た目に抵抗があるかもしれませんが、旅の思い出になるかも（「日本野鳥の会」の見解はどうなのでしょうね）。